露頭の風景　写真家の視点

斉藤　麻子

都心からアクセスし易いということもあり，地質的な見所の多い三浦半島の城ヶ島付近にはよく撮影で訪れています．海外町のスランプ構造の大きな曲線や城ヶ島の火炎構造のまさに炎のように見える線は，大地が活動した痕跡であると同時に，何者かが意識をもって描き出したかのようにも見えるから不思議です．

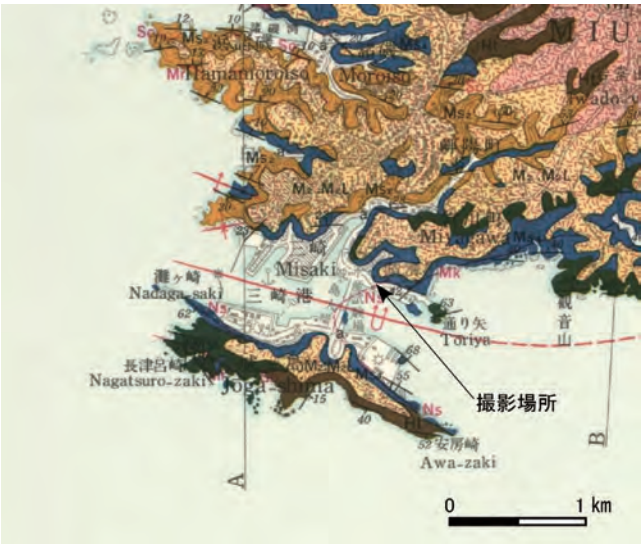
写真の“通り矢”の露頭もまた，地面から斜めに幾重にも地層の線が伸び，電線の線の方向とも相まって，現在の私たちの生活の場に絶妙なバランスを保って現われています．この偶然性を忠実に写真に収めようと，今回はアオリの使える４×５カメラという大判カメラを用い，いつもよりも少し緊張感をもって露頭と対面しました．カメラの特性上，被写体はピントグラスに上下左右が反転して写し出されます．撮影をしようと冠布を被ると，光が遮断され真っ暗闇になり，町の喧騒が少し遠くなりました．その日常から少し切り離されたような空間の中で，露頭がピントグラス上に現実とは逆の姿で立ち現われた瞬間，その昔は海底にあったものと今この地上で対面しているという違和感や驚きを，視覚的に体験できたような気がしました．

地質屋の視点

及川　輝樹

三浦半島南部，城ケ島に面した通り矢は，源頼朝や戦国時代の里見水軍にまつわる伝説がある地で，このすぐ南の城ケ島と共に，地層の観察に適したところです．

城ケ島も含めて三浦半島には，三浦層群とよばれる地層が広く分布します．写真の地層も三浦層群に属する約1100～500万年前の新第三紀中新世の末から鮮新世の初めにかけて深海に堆積した三崎層とよばれる地層からなります．三崎層は，砂岩と泥岩が交互に積み重なる，砂泥互層とよばれる地層で主に形成されています．砂泥互層は，砂と泥の色調や堅さ（削れにくさ）が異なることから縞々が目立つ地層です．横須賀市教育情報センターの作成したHP「三浦半島の地層・地質」によると，通り矢の砂岩は石灰質であるため，その部分が削れにくく，突き出ているため，縞々が強調されています．



5万分の1地質図「三崎」（小玉ほか，1980）の一部に加筆．
$Ms_{1\sim4}$が三崎層．

２月号では付加体中の石灰岩ブロックの写真でしたが，今回の露頭も付加体です．付加体は，プレート運動によって陸側に押し付けられて造られた地質体ですので，普通は強く変形しています．しかし，三崎層はあまり変形しておらず，一見普通の地層に見えます．これは三崎層が，伊豆半島の衝突に伴い，急激に地表にあらわれた世界でもっとも若い付加体であり，付加体の浅い部分のみが見えているためです．

参考文献

小玉喜三郎ほか（1980）三崎地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1図幅），地質調査所，38p.

三浦半島の地層・地質　http://www.edu.city.yokosuka.kanagawa.jp/chisou/index.html

高橋雅紀（2008）日本地方地質誌3　関東地方，地質学会編，朝倉書店，187–193.

Yamamoto,Y. *et al*. (2000)　*Tectonophysics*, **325**, 133–144.